

非線状音韻論から見た朝鮮語と 日本語の音節構造

李 炳 勲

要 旨

일본어와 한국어의 폐음절은, 複線音韻論에서 언어 일반의 보편적 음절구조라 주장하는 右分枝的構造와 정 반대의 左分枝的構造를 이루고 있다. 일본어와 한국어의 폐음절이 이러한 구조를 이루는 것은, 양국어가 원래 개음절어였기 때문으로 풀이된다. CVC 형의 폐음절에서 音節末子音은 새롭게 생겨난 요소이기 때문에, 核母音과의 결합력이 상대적으로 약하고, 원래부터 존재하고 있던 音節頭子音과 核母音의 결합력이 강한 左分枝的構造를 이루고 있다고 생각되는 것이다.

キーワード……左枝分かれ構造、閉音節後生説、末母音脱落、借字表記

1.はじめに

日本語と朝鮮語の比較研究において、音節構造の相違は早くから指摘されてきた(小倉進平1949:12-13、大江孝男1978:154、濱田敦1983:12等々)。日本語が開音節語であるのに対して、朝鮮語は閉音節が少なくない言語であり、両言語は音節の構造が異なるというのである。確かに朝鮮語は日本語より閉音節の比率が高く、音節末及び語末に立ち得る子音素の数(7つ)も多い。しかし、両国語が閉音節の比率や音節末子音素の数などでは差を見せるものの、両国語の閉音節を非線状音韻論(non-linear phonology)的な立場から比べてみると、注目すべき共通性がある。

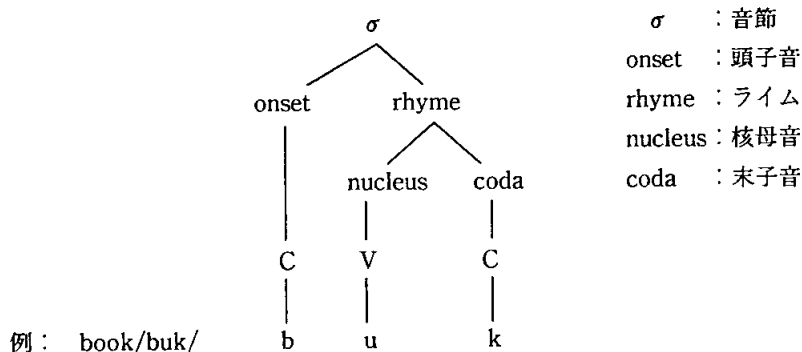
非線状音韻論的な立場から日本語と朝鮮語の閉音節の階層構造を比べ、両国語の閉音節が左枝分かれ構造をなすという共通性があることを明らかにし、またそのような共通性をもつ理由を通時的観点から説明するのが本稿の目的である。

2. 現代語音節の階層構造

2. 1. 普遍的な音節構造

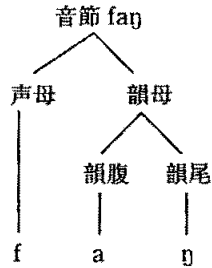
非線状音韻論では、音節が単なる音素の配列ではなく、構文論での句構造 (phrase structure) のように、階層的な組織をなしているとしており、英語の場合その構造が次のようであるとしている。

(1)



(1)のような構造は、金次均 (1987: 25) で指摘されたように、中国声韻学の反切による音節の分析とも一致する。中国語の音節は声母と韻母に分けられ、韻母はまた韻頭と韻腹と韻尾に分けられる。例えば、「方」/faŋ/は次のような音節構造をなしている。

(2)



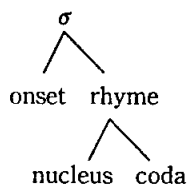
(1)の非線状音韻論による英語音節の分析と、(2)の中国声韻学の反切による中国語音節の分析は、音節を頭子音と残りの要素に分けるという点で共通している。即ち、(1)と(2)は、音節内部の構成要素間の結合関係において、頭子音と核母音との結び付きが弱く、核母音と末子音の結び付きが強い右枝分かれ構造をなすという点で一致しているのである。

音節内部の構成要素間の結合関係において、頭子音と核母音との結び付きが弱く、核母音と末子音の結び付きが強いというのは、他の言語の研究からも指摘されている。Nooteboom (1969) は、オランダ語の言い誤りにおいて、核母音と末子音の結合によるエラーが頭子音と核母音の結合によるエラーより多発する点を挙げ、オランダ語において、頭子音は末子音より核母音から分離しやすく、末子音と核母音は緊密に結び付いていると述べている。また、Mackay (1970) は、ドイツ語の言い誤りにおいて、頭子音間の交換エラー (transposition error) が、末子音間の交換エラーより圧倒的に頻発する点を挙げ、ドイツ語においても音節は頭子音と残りの要素に分けられるとしている。つまり、オランダ語やドイツ語の閉音節は C-VC のような構造をなしているということで、これを枝分かれ図で表すと(1)や(2)と同様の構造になる。

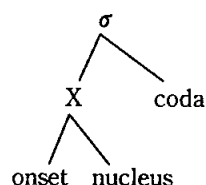
このように多くの言語で、核母音と末子音との結び付きは強いが、頭子音と核母音との結び付きは弱いという特徴が見られ、(3a)のような右枝分

かれ構造が、言語一般の普遍的な音節構造とまで言われている (Kay & Lowenstamm 1981, Cairns & Feinstein 1982 など)。

(3) a.

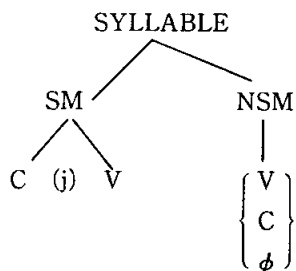


b.

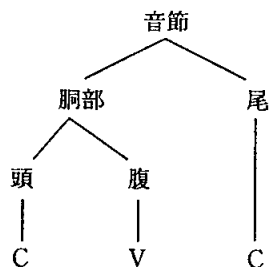


しかし、日本語や朝鮮語の音節は、(3a)とは逆の(3b)のような構造をなしているという主張が提起されている。Kubozono (1985) は、日本語の言い誤りを英語と比較分析し、日本語の音節の内部構造は英語と異なり、(4)のような構造をなしており、音節の内部構造は言語により多様である可能性があるとしている。一方、金次均 (1985) は、朝鮮語の言葉遊びの分析を通して、朝鮮語の音節は(5)のような左枝分かれ構造をなしているとしている。また、權仁瀚 (1987) も朝鮮語の言い誤りの分析を通して、朝鮮語の音節が左枝分かれ構造をなしているとしている¹⁾。

(4)



(5)



(4)と(5)が日本語と朝鮮語の正しい音節構造であるとしたら、両国語の音

節構造は左分枝分かれ構造をなすという点で一致する。このような構造は、非線状音韻論で言語一般の普遍的な構造と言われてきた(3a)のような右枝分かれ構造と全く逆であるという点で特に注目される。

2. 2. 日本語と朝鮮語の閉音節の内部構造

英語の音節が(3a)のような右枝分かれ構造を成しているという主張の主な根拠として、言い誤り・押韻の利用・言葉遊びなどの観察で、音節が分離される場合、頭子音と核母音の間が分離しやすいという点が指摘されている(Hockett 1967²⁾, Fudge 1987 など)。本節では、英語・日本語・朝鮮語の言い誤り・押韻の利用・言葉遊び・吃音などの比較考察を通して、日本語と朝鮮語は英語と異なり、音節が分離される場合、核母音と末子音の間が分離しやすいという共通点があることを見る。

2. 2. 1. 言い誤りからの考察

言い誤りが該当言語の構造的特徴を反映するということはよく知られている。英語・日本語・朝鮮語の言い誤りの例を比較しながら、音節内部の構成素間の結合関係を窺ってみよう。

2. 2. 1. 1. 混成エラー (blending error)

まず、混成エラーによる音節内部の分離を見てみる。(6)に英語(Fromkin 1971:260-261 より)、(7)に日本語(窪園晴夫1995:166より)、(8)に朝鮮語(權仁瀚1987:27、39より)の混成エラーの例を挙げる。(/. /は音節境界を表す。)

- (6) dr(aft) / (br)eeze → dreeze
 sm(art) / (cl)e.ver → sme.ver
 (7) ネコ / ニャンコ → ネンコ
 ne.(ko) / (nja)N.ko → neN.ko
 どうして / なんで → どんで

do(o.si.te)/(na)N.do → doN.de

(8) kjær.kwa.(cə.kin)/(kjær.kwa.ro)m.cə.kin → kjær.kwan.cə.kin

(結果的な/結果論的な)

sa.(cəm)/(nə)k.cəm → sak.c'əm

(シ点/ヨン点)

エラーによる混成語の結合ボタンにおいて、英語は(6)のように結合点が頭子音の直後に来るボタンの生産性が高いのに対して、日本語や朝鮮語は(7)(8)のように結合点が核母音の直後に来るボタンの生産性が高い。この差は英語と日本語・朝鮮語との音節内部構造の差に起因すると考えられる。即ち、英語の音節は(3a)のように核母音と末子音の結合力が強くて、頭子音と[核母音+末子音]の間で音節の分離が起こったが、日本語や朝鮮語の音節は(3b)のように頭子音と核母音の結合力が強くて、[頭子音+核母音]と末子音の間で音節の分離が起こったと考えられるのである。

2. 2. 1. 2. 交換エラー

次に、交換エラーによる音節内部の分離を見てみよう。(9)に英語(Fromkin 1971: 245 より)、(10)に日本語(窪蘭晴夫1995: 173より)、(11)に朝鮮語(田相範1980: 19より)の交換エラーの典型的な例を挙げる。

(9) well made → meɪt wæd

New York → Yew Nork

(10) のれんにうでおし (暖簾に腕押し) → うでんにのれおし

no.reN ni 'u.de 'o.si → 'u.deN ni no.re 'o.si

てっきんコンクリート(鉄筋コンクリート) → こんきんテンクリート

tek.kiN kōN.kuri.to → kōk.kiN teN.kuri.to

(11) kəm.cin.rok (検診録) → kən.cim.rok

hap.kjək (合格) → hak.kjəp

英語で一番多く現れる交換エラーは、(9)のように頭子音同士が交換されるボタンであり、日本語では〔頭子音+核母音〕同士、朝鮮語では末子音同士が交換されるボタンが一番多く現れる。(10)の〔頭子音+核母音〕同士の交換エラーと(11)の末子音同士の交換エラーは、同じボタンではないが、音節の分離が〔頭子音+核母音〕と末子音の間で起こるという点で共通している。つまり交換エラーにより音節が分離される場合、英語は頭子音と〔核母音+末子音〕の間に、日本語と朝鮮語は〔頭子音+核母音〕と末子音の間で分離が起こる傾向が強いのである。これは英語の音節が(3a)のような右枝分かれ構造を、日本語や朝鮮語の音節が(3b)のような左枝分かれ構造をなしているためと考えられる。

2. 2. 2. 吃音からの考察

吃音も言い誤りと同様に、自然な発話過程で起こる現象であり、吃音のボタンは該当言語の音韻構造を反映する (Ujihara & Kubozono 1994)。吃音による音節内部の分離を見てみよう。(12)に英語 (窪蘭晴夫1998: 33より)、(13)に日本語 (窪蘭晴夫1998: 33、太田聡1998: 166より)、(14)に朝鮮語の吃音の典型的な例を挙げる。

(12)s-s-s-six

t-t-t-ten

(13)to-to-to-toNbo (とんぼ)

sa-sa-saNgo (サンゴ)

(14)mu-mu-mu-mur (水)

sa-sa-sa-saŋpjəŋ (上兵)

吃音の場合、英語・日本語・朝鮮語の何れも語の最初の部分を繰り返す形で吃ることが多い。ところが、英語の場合は(12)のように頭子音を繰り返すのが最も一般的であるが、日本語や朝鮮語は(13)(14)のように「頭子音＋核母音」までを繰り返すのが一般的である³⁾。

吃音による音節の分離においても、言い誤りの場合と同様に、英語は頭子音と核母音の間で分離が起こるケースが多いのに対し、日本語や朝鮮語は核母音の直後に分離が起こるケースが多い。これも日本語や朝鮮語の音節が(3)(4)のような左枝分かれ構造をなしている証拠と考え得る。

2. 2. 3. 言葉遊びからの考察

言葉遊びも自然発生的なものは、該当言語の構造的な特徴を反映すると言える。(15)と(16)に英語の言葉遊びであるピッグ・ラテンとオブ言葉の例(ロビンズ・バーリング1974:177より)を、(17)に日本語の言葉遊びであるバビブ語の例(大田聡1998:161より)を、(18)と(19)に朝鮮語の言葉遊びであるボブリ語とノサ語の例(金次均1987:31より)をあげる。

(15)ピッグ・ラテン (Pig Latin)：頭子音のあと/ey/を付けて後ろにもっていく。

shout → /awtsey/

yell → /elyey/

(16)オブ言葉 (“op”language)：各音節の母音の前に/ap/を入れる。

will → /wapil/

give → /gapiv/

(17)バビブ語：母音が同じバ行音を1単位ごとに挿入する。

a.koN.ja (今夜) → ko.boN.bu.ja.ba

b.kaN.no (菅野) → ka.baN.ba.no.bo

(18)ボブリ語 (啞語)：各音節の母音のあとに母音が同じ/pV/ [bV] を入れる。

'in.su.ja (仁秀 (人名) や) → 'i.pi.n.su.pu.ja.pa

kwaŋ.ho.ha.ko (光鎬 (人名) と) → kwa.paŋ.ho.po.ha.pa.ko.po

(19)ノサ語：母音のあとに/nosa/を入れる。最初の音節には義務的に入れるが、二番目以下の音節には挿入が任意的である。

hak.kjo.'e (学校へ) → ha.no.sak.kjo.'e

kan.ta (行く) → ka.no.san.ta

英語の言葉遊びである(15)のピッグ・ラテンと(16)のオブ言葉は、その規則は全く異なるが、音節が頭子音と核母音の間で分離されるという点で共通している。

日本語の言葉遊びである(17)のバビブ語で、(17a)と(17b)は別のインフォーマントにより得られた例である(大田聡1998:161)。(17a)では、撥音にウの音価が与えられ、撥音の後に/bu/が挿入されたのに対し、(17b)では、撥音の後に先行音節(即ち/kaN/)の母音と同一の母音をもつバ行音/ba/が挿入された。このように、(17a)と(17b)は撥音の後に入れるバ行音の母音の選択においては差を見せているが、撥音で終る音節で母音と撥音を分離させたという点では一致する。つまり、バビブ語で閉音節の分離は、核母音と末子音の間で起こるのである。

朝鮮語の言葉遊びのうち、(18)のボブリ語は、バビブ語とごく類似な言葉遊びであり、閉音節は核母音と末子音の間で分離される。また、(19)のノサ語においても、閉音節が分離される場合は、核母音と末子音の間が分離され、その中に/nosa/が挿入される。

(15)―(19)は、自然発生的な言葉遊びである。英語では(15)(16)のように音節が頭子音と[核母音+末子音]に分離される言葉遊びが、日本語や朝鮮語では(17)や(18、19)のように音節が[頭子音+核母音]と末子音に分離される言葉遊びが自然発生的に生じた。これも、英語の音節は(3a)のような右枝分かれ構造をなし、日本語や朝鮮語の音節は(3b)のような左枝分かれ構造

をなすためと考えられる。

2. 2. 4. 押韻の利用からの考察

押韻の利用においても、日本語と朝鮮語は英語と差を見せる。

㉔ A slumber did my spirit *seal* ;

I had no human *fears* :

She seemed a thing that could not *feel*

The touch of earthly *years*.

No motion has she now, no *force* ;

She neither hears nor *sees* ;

Rolled round in earth's diurnal *course*,

With rocks, stones, and *trees*.

—William Wordsworth, *A slumber did my spirit seal*

㉕ 秋來相顧尚飄蓬

未就丹砂愧葛洪

痛飲狂歌空度日

飛揚跋扈為誰雄

—杜甫作、贈李白

㉔の英詩を見れば、1・3、2・4、5・7、6・8行の末音節は、[核母音+末子音] が一致している。英詩ではこのように脚韻を利用してリズム感を表す場合が多い。

また、漢詩でも脚韻がよく利用される。㉕で、1句、2句、4句の最後の音節「蓬」、「洪」、「雄」の中古音は、各々 buŋ, ŋuŋ, ŋiuŋ であり(中古音の再講は、藤堂明保(1978)による)、[核母音+末子音] uŋ が押韻を踏んでいる。漢詩は昔から朝鮮、日本にも伝えられ、日本や朝鮮でも、漢詩を作るときは脚韻が利用されている。しかし、日本や朝鮮の伝統詩では、

脚韻よりは音数律がリズムに関与する。例えば、日本の和歌は5・7・5、7・7、朝鮮の詩調は3・4・3・4、3・4・3・4、3・5・4・3という音数律をもってリズム感を表す。

詩で脚韻をなす部分は[核母音+末子音]であり、これは音節構造でライムと呼ばれる部分と一致する。英詩や漢詩で脚韻が発達したのは、核母音と末子音の結び付きが強いためであり⁴⁾、日本や朝鮮の伝統の詩で脚韻があまり利用されないのは、核母音と末子音が強く結び付いていないためと考え得る。

以上のように、英語・日本語・朝鮮語の言い誤り、吃音、言葉遊び、押韻の利用などを比較考察した結果、英語の音節は頭子音と核母音の間で分離される傾向が強いのに対して、日本語や朝鮮語の音節は核母音と末子音の間で分離される傾向が強いことがわかった。したがって、英語の音節は(3a)のように核母音と末子音の結び付きが強い右枝分かれ構造をなしているのに対し、日本語や朝鮮語の音節は(3b)のように頭子音と核母音の結び付きが強い左枝分かれ構造をなしていると言えよう。

3. 左枝分かれ構造形成に関する仮説

2. で朝鮮語と日本語の音節は、音節構成素間の結合関係において、頭子音と核母音が強く結ばれており、(3b)のような左枝分かれ構造をなしていることを検証してみた。では、日本語と朝鮮語の音節は、なぜ普遍的な音節構造と主張されてきた(3a)のような右枝分かれ構造とまったく逆の構造をなしているかという疑問が生じる。が、ここではその理由を通時的観点から考えてみる。

まず、日本語の閉音節が左枝分かれ構造をなす理由を通時的観点から考えると、CVC形の閉音節がCV形の開音節より後から生じた点にその原因があると思われる。古代日本語は、すべての音節が開音節(CV)であった

というのが定説である。音節末子音/N/や/Q/は後から出来たため、閉音節において、もともとあった頭子音と核母音の結び付きより核母音と末子音の結び付きが弱いのはごく自然であると言える。つまり、日本語の閉音節の左枝分かれ構造形成に対して②2のような仮説が想定される。

②2日本語の閉音節の左枝分かれ構造形成に対する仮説

元々日本語は CV のような開音節のみであった。だが、中国語の影響や音便などにより CVC のような閉音節が生じた。このようにして生じた閉音節で、末子音は新しく出来た要素であるため、核母音との結び付きが弱く、もともとあった頭子音が、核母音と強く結び付いている左枝分かれ構造をなしているのである。

では、朝鮮語の場合はどのように説明できるか、②2のような仮説が朝鮮語にも当てはまるのかという問題が残る。この問題を解するためには、元々朝鮮語も開音節語であったかどうかという点を究明しなければならない。

3. 1. 末母音の脱落による閉音節の形成

朝鮮語の場合は、その具体的な姿がわかるのは、ハングルが発明された（1443）中世朝鮮語以降であるが、ハングルの発明当時の表記を見れば、中世朝鮮語は、現代朝鮮語と同様、閉音節が少なからず存在していたに間違いはない。が、古代ないし原始朝鮮語は中世・現代朝鮮語とは異なり、閉音節が存在しなかったという朝鮮語の閉音節後生説が存在する。服部四郎（1950）は、日本語の鹿児島方言や蒙古語では第2音節の母音の消失によって閉音節が出来つつある点を指摘し、アルタイ諸言語や朝鮮語においても、過去に同様の音韻変化の起きた蓋然性があると述べている。この仮説は、少なからぬ学者により支持されている（金亨奎1962：82-84、李炳鉉1967、千素英1983など）。

金享奎（1962：84）は、現代朝鮮語の閉音節が中世ハングル表記に開音節として現れている語例をあげ、これらの語例には母音脱落が起こったとしている。（23）でハングルはローマ字で転写する。）

23) 中世ハングル表記	現代語
野：tīrī (『竜飛御天歌』69)	> tīr
鏡：kə'uru (『楞嚴經諺解』7・14)	> kə'ur
毛：təri (『楞嚴經諺解』1・74)	> tər

開音節の末母音の脱落による閉音節形成の例は、河野六郎(1949、1967)でも指摘されている。河野六郎(1949)は、『龍飛御天歌』(1445)に地名「熊津」が *komanara* と書かれていることを指摘し、kom(熊)の古形を *koma* と再構している。また、河野六郎(1967)では、『日本書紀』の次の記事で「嶋」がセマと訓まれている点などから、səm(島)の古形を *sema と再構している。

24) 百濟人呼此嶋曰主^{ニリムセマ}嶋也 (『日本書紀』雄略紀5年)

səm(島)が古形で末母音を保持した開音節語であったというのは、『日本書紀』所引の百濟史料『百濟新撰』に見られる次の記事からもわかる。

25) 百濟新撰云……至筑紫嶋生斯麻⁵⁾王。自嶋還送。不至於京産於嶋故因名焉。 (『日本書紀』武烈紀4年)

25)の内容を見れば、「斯麻」が「嶋(島)」を意味する古代朝鮮語(或いは百濟方言)の表記であることがわかる。従って、「島」を意味する古代朝鮮語(或いは百濟方言)が開音節/sVma/であったと推定されるのである。

末母音の脱落による閉音節形成は、用言でも行われたと見られる。李炳銑（1965）は、現代朝鮮語の用言の閉音節語幹が、中世のハングル表記資料で開音節として現れる例をあげ、用言でも語幹末母音の脱落により閉音節が形成されたという仮説を立てている。

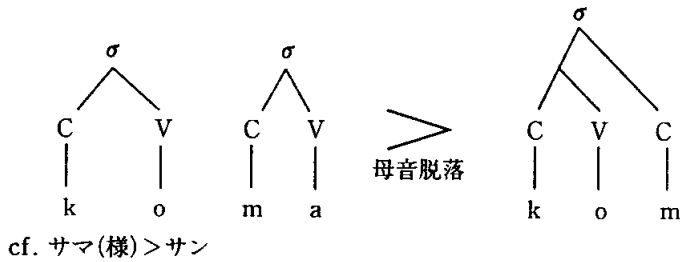
㉔CVCV-CV>CVC-CV

nəmīta（超える）	>	nəmta
simīta（植える）	>	simta
nipīta（着る）	>	nipta（>'ipta）
sipīta（ようだ）	>	sipta
'uruta（咆える）	>	'urta
'isita（有る）	>	itta

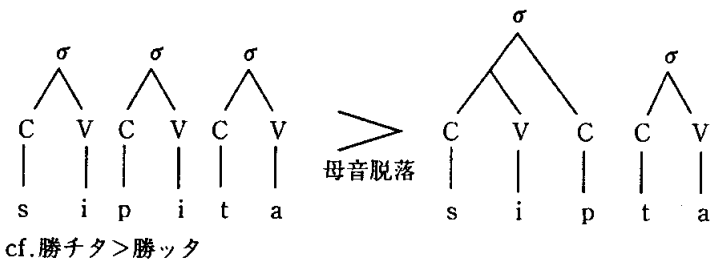
李炳銑（1965）は、この仮説の根拠の一つとして、現代朝鮮語でも済州島方言などでは、閉音節語幹が末母音を保持した形として現れる点をあげ、その説得力を高めている。この仮説は日本語の促音・撥音便を連想させるもので興味深い。

以上で見たように、CV₁CV₂ 形の開音節から V₂ の脱落により CVC 形の閉音節になったことを、文献により考証できる語例があり、日本語の鹿児島方言のような語末母音の消失による閉音節の形成が、朝鮮語にもあったことは間違いない。このような語例の閉音節形成の過程は、次のように表せる。

(27) koma (熊) > kom



(28) sipīta (ようだ) > sipta



3. 2. 有子音尾字による用字法と古代語の音節

3. 1. では、CV₁CV₂ 形の開音節から V₂ の脱落による CVC 形の閉音

節形成の語例を考察した。そのような語例の存在は、朝鮮語の閉音節後生説に対する一つの傍証にはなるが、それが、起源的に朝鮮語が開音節語であったことを立証する直接的な証拠であるとは言いがたい。

本節では、古代朝鮮語に対する直接的な資料と言える借字表記の考察を通して、古代朝鮮語の開・閉音節性を推定してみたい。が、その前にまず、日本の万葉仮名において、有子音尾字による用字法を見てみよう。

万葉仮名において、有子音尾字による用字法は、次の(11)のように三つに分類される（春日政治1933参照）。

㉑ 万葉仮名の有子音尾字による用字法

- a. 略音仮名：子音韻尾を省略（無視）して一つの開音節の表記に用いる音仮名。

例：奈良ナラ、安藝アギ_甲

- b. 連合仮名：子音韻尾を後続子音に連ね合わせて用いる音仮名。

例：甲斐カヒ_乙、億岐オキ_甲

- c. 二合仮名：子音韻尾に母音を添えて2音節の表記に用いる音仮名。

例：薩摩サツマ、筑紫チクシ

有子音尾字が㉑のように用いられたのは、古代日本語の開音節性に起因するというのが定説（春日政治1933）である。古代日本語には、漢字の子音韻尾のような音節末子音がなかったため、有子音尾字を借用する際、子音韻尾を省略するか、或いは後続子音に連ね合わせる方法で一つの開音節の表記に用いた。または、子音韻尾に母音を添え、2音節の表記に用いたというのである。

ところが、㉑の用字法は、古代朝鮮の借字表記からも看取される。古代朝鮮語の実態を窺える文献資料はごく少ないが、幸いに、地名表記資料がある程度残っており、借字表記法を究明する端緒になる。古代朝鮮では、

新羅が三国を統一した（668）あと、757年全国の地名を漢語式に改定したが、その変動事項が『三国史記』『地理志』に収録されている。そのため、『三国史記』『地理志』には新旧地名の対応例が見られる。また、地名改定以前の旧地名及び、改定による新地名において、同一地名に対する異表記が書かれている場合があり、研究のための良い対応例になっている。その諸対応例の内、借音字間の対応において、有子音尾字の対応様相を考察した結果、古代朝鮮でも㉓と同様の用字法が使用されたと考えられるのである。

『三国史記』『地理志』の同一地名の異表記間の対応例、および新旧地名間の対応例を見れば、㉓のように有子音尾字が無子音尾字と対応する例が現れる。

㉓有子音尾字と無子音尾字との対応（太字が有子音尾字）

- | | | |
|------------------------------------|---------|------------|
| a. 河西 <u>良</u> 一作何瑟羅 | -ŋ : -φ | （巻35高句麗地名） |
| b. 奴 <u>同</u> 覓縣一云如豆覓縣 | -ŋ : -φ | （巻34新羅地名） |
| c. 道 <u>臨</u> 縣一云助乙 ^㉔ 浦 | -m : -φ | （巻37高句麗地名） |
| d. 潘 <u>南</u> 縣本百濟半 <u>奈</u> 夫里縣 | -m : -φ | （巻36百濟地名） |
| e. <u>首</u> 知縣一云 <u>新</u> 知 | -n : -φ | （巻37高句麗地名） |
| f. <u>分</u> 嵯郡一云 <u>夫</u> 沙 | -n : -φ | （巻37百濟地名） |
| g. <u>朔</u> 邑縣本高句麗 <u>所</u> 邑豆縣 | -k : -φ | （巻35高句麗地名） |
| h. 屈旨縣一云屈 <u>直</u> | -k : -φ | （巻37百濟地名） |
| i. 今 <u>武</u> 縣本百濟今 <u>勿</u> 縣 | -t : -φ | （巻36百濟地名） |
| j. <u>熱</u> 兮縣一云泥兮 | -t : -φ | （巻34新羅地名） |

㉓で下線の有子音尾字は、万葉仮名の略音仮名と同じ用字法で用いられたと考えられる。㉓の例のうち、(30a)を㉓に再録し、㉓の万葉仮名と比較してみよう。

- (31)奈良乃京之 (『万葉集』 卷 6・1049)
今畝原・奈羅・山村高麗人之先祖也 (『日本書紀』 欽明紀26年)
(32)河西良一作何瑟羅 (『三国史記』 卷35高句麗地名)

(31)でナラという地名が「奈良」とも「奈羅」とも書かれたことがわかる。即ち、「奈良」と「奈羅」は、万葉仮名による同一地名の異表記である。ここで、万葉仮名「良」は「羅」と同じラの表記に用いられている。有子音尾字「良」が、鼻音韻尾リリの省略された略音仮名として用いられたのである。ラの表記に「良」が用いられたのは、古代日本語に/リ/で終わる閉音節がなかったので、「良」の鼻音韻尾リリが省略され、「良」が/ra/と発音されたためである。もちろん、「良」が好字である点も考えられるが、それはラと読まれる字の中での好字なのである。

(32)の「河西良」と「何瑟羅」は、高句麗の同一地名に対する異表記例であるが、「良」と「羅」の対応は、(31)の万葉仮名のそれと全く同じ様相を呈している。(31)の場合と同様、(32)の「良」は、「羅」と同じ開音節/ra/の表記であると考えられる。もし、「良」や「羅」が閉音節/raリ/の表記であるとしたら、/raリ/を表すのに、「羅」を用いた理由が説明できない。閉音節/raリ/を表すのにふさわしい字は、「郎」、「廊」、「瑯」など他にも十分あるため、あえて子音韻尾をもたない「羅」を用いるわけがないのである。逆に、古代朝鮮語が古代日本語と同様に開音節語で、「良」や「羅」が開音節/ra/の表記であるとすれば、この対応関係はうまく説明できる。開音節語の古代朝鮮語に有子音尾字「良」が受容される際、「良」の鼻音韻尾リリは省略され、「良」が/ra/と受容された。そのため、無子音尾字「羅」と対応していると解釈できるのである。

(30)の他の例でも、下線の有子音尾字が、無子音尾字と対応するのは、子音韻尾が省略された開音節の表記に用いられたため—即ち、万葉仮名の略音仮名と同じ用字法で用いられたため—と考えられる。

『三国史記』『地理誌』には、(33)のように有子音尾字が2字と対応する例も見られる。

(33)有子音尾字と2字との対応

- | | | |
|------------------------------|----------|------------|
| a. 咸悦縣本百濟甘勿阿縣 | -m : mV- | (卷36百濟地名) |
| b. 甘蓋縣本古莫夫里 | -m : mV- | (卷37百濟地名) |
| c. 進禮郡本百濟進仍乙郡 | -n : nV- | (卷36百濟地名) |
| d. 叡陵夫里郡一云竹樹夫里一云仁夫里 | -n : rV- | (卷37百濟地名) |
| e. 安賢縣本阿尸兮縣一云阿乙兮 | -n : rV- | (卷34新羅地名) |
| f. 若只頭恥縣一云朔頭 | -k : kV- | (卷37高句麗地名) |
| g. 同福縣本百濟豆夫只 ⁷⁾ 縣 | -k : kV- | (卷36百濟地名) |
| h. 習谿縣本高句麗習比谷縣 | -p : pV- | (卷35高句麗地名) |
| i. 岌山郡本高句麗及伐山郡 | -p : pV- | (卷35高句麗地名) |
| j. 述川郡一云省知貢 | -t : tV- | (卷37高句麗地名) |
| k. 單密縣本武冬彌知一云曷冬彌知 | -t : tV- | (卷34新羅地名) |
| l. 屠夫婁城本肖利巴利忽 | -t : rV- | (卷37高句麗地名) |
| m. 仇乙峴一云屈迂 | -t : rV- | (卷37高句麗地名) |

(33)で2字と対応する下線の有子音尾字は、万葉仮名の二合仮名と同様の用字法で用いられたと考えられる。

- | | |
|----------|-----------------|
| (34)次筑紫洲 | (『日本書紀』神代紀・上4段) |
| 都久之閑余 | (『万葉集』卷20・4359) |

(34)で地名ツクシの表記「筑紫」と「都久之」とを対照してみると、ツクの表記において、二合仮名「筑」が2字「都久」と対応しており、(33)の例と同じ様相を呈している。(34)の「筑」が、入声韻尾 k に母音/u/が添えられ、

2 音節/tuku/の表記に用いられたことと同様、㉓の下線(1字)の有子音尾字も、子音韻尾に母音が添えられ、2 音節の表記に用いられたと考えられる。例えば、(33a)の「咸」は鼻音韻尾 m に母音/u/が添えられ/kamu/の表記に、(33g)の「福」は入声韻尾 k に母音/i/が添えられ/puki/の表記に用いられたと推定される。

『三国史記』『地理誌』の地名表記に用いられた有子音尾字の中には、万葉仮名の連合仮名と同じ用字法で用いられたと考えられる場合もある。

- | | |
|--------------------------------------|------------------|
| ㉓a. 己汝縣本 <u>今勿</u> | (『三国史記』卷37百濟地名) |
| b. 咸悅縣本百濟 <u>甘勿</u> 阿縣 | (『三国史記』卷36百濟地名) |
| c. 進禮郡本百濟 <u>進</u> 仍乙郡 | (『三国史記』卷36百濟地名) |
| d. <u>若只</u> 頭恥縣 <small>一云朔頭</small> | (『三国史記』卷37高句麗地名) |
| e. 寶城郡本百濟 <u>伏忽</u> 郡 | (『三国史記』卷36百濟地名) |
| f. 習谿縣本高句麗 <u>習比</u> 谷縣 | (『三国史記』卷35高句麗地名) |
| g. 炭山郡本高句麗 <u>及伐</u> 山郡 | (『三国史記』卷35高句麗地名) |
| h. <u>悉直</u> 郡 <small>一云史直</small> | (『三国史記』卷37高句麗地名) |
| i. <u>蔚珍</u> 郡本高句麗 <u>于珍也</u> 縣 | (『三国史記』卷35高句麗地名) |

㉓で下線の有子音尾字は、その子音韻尾が後続する字の声母と同一(調音位置の)音であり、子音韻尾を後続子音に連ね合わせて用いる方法が使用されたと見られる。例えば、(35f)で「習比谷」の「習比」は/sVpi/の表記であり、「習」の入声韻尾 p を「比」の声母に連ね合わせる方法が使用されたと考えられる。これは、万葉仮名「甲斐」で「甲」の入声韻尾 p を「斐」の声母に連ね合わせたのと同じ方法であると言える。

以上のように、『三国史記』『地理誌』の借字表記の考察から、古代朝鮮で略音仮名・二合仮名・連合仮名と同じ用字法が使用されたことがわかる。万葉仮名において、有子音尾字が略音仮名、二合仮名などの用字法で用い

られていたのが、古代日本語の開音節性に起因するのと同様に、古代朝鮮で同じ用字法が使用されたのは、古代朝鮮語が開音節語であったためと見られる。

3. 1. と 3. 2. の考察から、朝鮮語も元々開音節語であったと推定される。そして、朝鮮語の音節が左枝分かれ構造をなすのは、この点に起因すると思われる。即ち、朝鮮語音節の左枝分かれ構造の形成に関して、次のような仮説が想定される。

㉞朝鮮語の閉音節の左枝分かれ構造形成に対する仮説

朝鮮語も日本語と同様に CV 形の開音節が基本構造であったが、漢字語彙の多量受容や語末母音の脱落などによって、閉音節が生じた。

このようにして生じた閉音節で、末子音は新しく出来た要素であるため、核母音との結び付きが弱く、もともとあった頭子音が、核母音と強く結び付いている左枝分かれ構造をなしているのである。

4. む す び

非線状音韻論的な立場から日本語と朝鮮語の閉音節の階層構造を比べた結果、両国語が左枝分かれ構造をなすという共通性があることがわかった。少なくとも二つの言語（日本語と朝鮮語）の閉音節は左枝分かれ構造をなしているという事実から、音節が頭子音とライムに分離されるという右枝分かれ構造は、言語一般に適応される普遍的な構造として認められない。

日本語と朝鮮語の閉音節が左枝分かれ構造をなすのは、両国語の音節の発生において、CVC 形の閉音節が CV 形の開音節より後に生じたという点にその原因があると思われる。CVC 形の閉音節で、末子音は新しく出来た要素であるため、核母音との結び付きが弱く、頭子音が核母音と強く結び

付いている左枝分かれ構造をなしていると考えられるのである。

〈注〉

- 1) 金次均 (1985)、權仁翰 (1987) と同様の見解が、田相範 (1980) でも提出されている。田相範 (1980) は、朝鮮語の言い誤りを英語と比較分析し、朝鮮語は頭子音と核母音との結び付きが強く、核母音と末子音との結び付きは弱い CV—C の構造であると主張している。これを枝分かれ図に表せば、(3b) のような構造になる。
- 2) Hockett (1967) では、枝分かれ図は描かれていないが、Hockett (1967) の音節構造仮説を枝分かれ図で表せば、(3a) のような右枝分かれ構造になる。
- 3) 朝鮮語の吃音の例(14)は、日常生活での筆者の観察によるものであり、資料としての客観性が疑問視されるかも知れない。ところが、朝鮮語の辞書である金星出版社『国語大辞典』2版を見れば、動詞 *tətimta* (吃る) の説明に関する例文を次のようにあげている。
ka-ka-kanta (行く)
この例文は、(14) と同じパターンであり、朝鮮語の吃音で〔頭子音+核母音〕までを繰り返すのが一般的であることは間違いあるまい。
- 4) 逆に脚韻の発達により核母音と末子音の結び付きが強くなったとも考えられる。
- 5) 「斯麻」は『三国史記』や『三国遺事』に「斯摩」と書かれている。ところが、都守熙 (1995: 17) によると、最近発掘された武寧王陵の誌石に、次のような記事があるとする。
寧東大獎軍百濟斯麻王年六十二歲癸卯年五月丙戌朔七日壬辰崩
これを見ても、『日本書紀』の百濟史料がもつ資料的な価値の高さがわかる。
蓋蘇文或云蓋金姓泉氏 (『三国史記』卷49列伝9 創助利・蓋蘇文)
大臣伊利柯須彌弒大王 (『日本書紀』皇極紀元年)
泉井口縣 云於乙買申 (『三国史記』卷37高句麗地名)
李基文 (1968: 121, 123) は、高句麗人「泉蓋蘇文」が『日本書紀』に「伊利柯須彌」と書かれていることから、「泉」と「伊利」との対応に注目した上で、「泉」が『三国史記』の地名で「於乙」と対応していることから、「於乙」=「伊利」の対応関係が得られることを指摘した。だが、この場合、「乙」を語末音 l (r) の表記とする立場 (李基文1968: 123) と rV 形の音節の表記とする立場 (李炳鉄1982: 216) が両立している。筆者の考えでは、『三国史記』の地名表記で「乙」が「禮」、「臨」などの声母が来母に属する字と対応している点などから、「乙」は rV の表記に用いられたと思われる。
進禮郡本百濟進仍乙郡 (卷36百濟地名)
- 7) 「只」の中古音の再構音は ʒiɛ であり (藤党明保編1978: 205)、現行朝鮮漢字音は /ci/ [ʧi] である。しかし、古代の朝鮮漢字音では /ki/ であったというのが定説である (鮎貝房之進 1931: 5、李基文1972: 63、金東昭1995: 27-28 など)。

〈参考文献〉

- 鮎貝房之進1931『雑攷』2輯上、近沢出版社
大江孝男1978『朝鮮語と日本語』『岩波講座日本語12日本語の系統と歴史』岩波書店
大田聡1998『音韻過程と韻律構造の諸相』『音韻構造とアクセント』研究社出版
小倉進平1949『朝鮮語と日本語』『国語科学講座24』明治書院 (1975『小倉進平著作集4』京都大学文学会所収)
春日政治1933『仮名発達史序説』『国語科学講座』明治書院 (1982『春日政治著作集1』勉誠社所収)

- 窪菌晴夫1995『語形成と音韻構造』くろしお出版
- 窪菌晴夫1998「音韻構造の普遍性と個性」『音韻構造とアクセント』研究社出版
- 河野六郎1949「日本語と朝鮮語の二三の類似」『人文科学の諸問題—共同研究稿』八学会連合
(1979『河野六郎著作集1』平凡社所収)
- 河野六郎1967「古代の日本語と朝鮮語」『ことばの宇宙』(1979『河野六郎著作集1』平凡社所収)
- 服部四郎1950「日本語の系統(1)—研究の方法—」『日本民族学』岩波書店 (1999『日本語の系統』岩波書店所収)
- 濱田敦1983「日本語と朝鮮語」『続朝鮮資料による日本語研究』臨川書店
- ロビンズ・バーリング著、高原脩・本名信行訳1974『言語と文化』ミネルヴァ書房
- 權仁翰1987「音韻論的機制의 心理的實際에 對한 研究」『国語研究』76、国語研究会
- 金東昭1995「古代韓國語의 綜合的研究」『한글』227号、한글学会
- 金次均1985「平詩調의 音律」『語文論集』4・5集、忠南大学校国語国文学科
- 金次均1987「国語 音節核의 構造와 音声學的 表象」『言語』8号、忠南大学校語學研究所
- 金亨奎1962『増補国語史研究』一潮閣
- 都守熙1995「古代国語 音韻變化의 두 方向」『韓國語音韻史研究』塔出版社
- 李基文1968「高句麗의 言語와 그 特徵」『白山學報』4号、白山学会
- 李基文1972『改定版国語史概説』塔出版社 (1998新訂版刊行)
- 李炳銑1965「用言活用에 서의 末音母音의 脱落現象」『国語国文学』28号
- 李炳銑1967「格助詞의 發達에 對한 試考」『語學研究』3卷1号、서울大学語學研究所
- 李炳銑1982『韓國古代国名地名研究』亞細亞出版社
- 田相範1980「Lapsus linguae 의 音韻論的 解釈」『言語』5卷2号、韓國言語学会
- 千素英1983「古代国語의 音節末子音에 對한 考察」『弘益語文』2輯、弘益大学
- Cairns, E.C. & M.H. Feinstein 1982 Markedness and the theory of syllable structure.
Linguistic Inquiry 13
- Fromkin, V.A. 1971 The non-anomalous nature of anomalous utterances. In V.A. Frommkin (ed). 1973 *Speech errors as linguistic evidence*. The Hague: Mouton
- Fudge, Erik 1987 Branching structure within the syllable. *Journal of linguistics* 23
- Hockett, C.F. 1967 Where the tongue slips, there slip I. In V.A. Frommkin (ed). 1973 *Speech errors as linguistic evidence*. The Hague: Mouton
- Kay, J.D. & Lowenstamm, j. 1981 Syllable structure and markedness theory. *Theory of markedness in generative grammar*. Scuola normale superiore di pisa
- Kubozono, Haruo 1985 Speech errors and syllable structure. *Linguistics and philology* 6
- Mackay, D.G. 1970 Spoonerism: The structure of errors in the serial order of speech. In V. A. Frommkin (ed). 1973 *Speech errors as linguistic evidence*. The Hague: Mouton
- Nooteboom, S.G. 1969 The tongue slips into patterns. 1973 *Speech errors as linguistic evidence*. The Hague: Mouton
- Ujihara, A. & Kubozono, H. 1994 A phonetic and phonological analysis of sturring in Japanese. *Proceedings of ICSLP '94*, Yokohama, Japan, 3

<參考資料>

- 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注1967『日本古典文学大系67日本書紀上』岩波書店
- 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注1965『日本古典文学大系68日本書紀下』岩波書店
- 高木市之介・五味智英・大野晋校注1959『日本古典文学大系5万葉集二』岩波書店
- 高木市之介・五味智英・大野晋校注1962『日本古典文学大系7万葉集四』岩波書店
- 石井正之助1980『英詩の世界』大修館書店

非線状音韻論から見た朝鮮語と日本語の音節構造（李）

藤堂明保1978『学研漢和大字典』学習研究社

目方誠1965『漢詩大系9 杜甫』集英社

金富軾1964『三国史記』学習院大学東洋文化研究所

윤영語文研究所1991『国語大辭典』2版、金星出版社